



Title	エッセイ : 未来共生と「中間人」
Author(s)	崔, 美善
Citation	未来共生学. 2019, 6, p. 158-161
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/72125">https://doi.org/10.18910/72125</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## エッセイ

## 未来共生と「中間人」

## 崔 美善

大阪大学大学院医学系研究科公衆衛生学教室特任研究員  
未来共生プログラム修了生（2期生）

未来共生プログラムの履修者募集要項を初めて手にしたのは2014年2月だった。日本に来て一年程経った時で、医学系研究科の博士課程入学試験には合格したが、研究はよく分からなかったし、生活費のためにバイト三昧で、何をしに日本に来たか分からなくなった時期だった。大学院に入る前に未来が見えなくなった私は、大学院入学を機に、勉強や研究に専念が出来て、他の活動にも参加できる、4年間の大学院生活を豊かにできる方法を探していた。

その時、大阪大学からいくつかの博士課程リーディングプログラムのパンフレットが届き、その中にあった未来共生プログラムの説明を読んで、未来の4年間で充実させてくれる予感がした。指導教員の磯博康先生に相談したところ、磯先生はたまたま未来共生の学内プログラム担当者だった。相談の中で2013年の履修者募集要項には医学系研究科は募集していなかったが、2014年から医学系研究科の学生のために4年コースも出来ている事を聞いて、運命を感じずにはいられなかった。そして、それは正に運命だった。未来共生のおかげで、この4年間、私は当初では想像も出来なかった事を経験し、進歩を得た。国内実習を通じて、日本のエイズ予防について知り、NGOの仕組みや運営を垣間見ることができた。英語の授業でスピーキングとライティングを練習し、海外研究でリスニングを鍛えると同時に視野を広げた。コミュニティ・ラーニングを経て、インタビュー

の仕方を学び、震災を経験した人々の本当の声を聴けた。夢でしかなかったWHOでのインターンシップを経験し、統計解析や論文読みのコツを身に着けつつ、スーパーバイザーと共にWHO報告書の執筆作業にも参加し、名前も載せてもらった。

振り返ってみると、忙しくて大変な4年間だったが、一緒にいて楽しい2期生と優しい先生方、事務員の方とのつながりが嬉しくて、未来共生が私の居場所だったことが心地よく、そのおかげで4年間頑張ってきた。多様な分野の多様な活動を経験した4年間の出来事や登場人物をこのエッセイですべて語る事は出来ないの、今回は未来共生から得た事とそのお返しについて述べたい。

未来共生を知った1ヶ月後、プログラム履修希望者の筆記試験・面接があった。二つの試験で、私自身の心の中にあったキーワードは「中間人」だった。未来共生とは違う文化、宗教、背景、価値観等、違うものを持っている人々が共に生きる未来を創るために何が必要かを考えるプログラムだったと私は理解している。違う言語を話している場合はお互いの話を通訳してくれる「中間人」が必要で、お互いの言葉の意味を知るだけでも理解し合うための大きな一歩となる。この「中間人」を我々は通訳者と呼ぶ。未来共生を知る前に私が思い出せた「中間人」は通訳者だけだった。だが、未来共生での社会学の授業で、慣れない文系の思考経路で物事を考えようと努力しながら議論をした時、さらに、私がマイノリティになる現場での活動で当事者たちと会話した時、理解し合えない違いというのは言葉だけではないと分かった。同じ年代に同じ地域で生まれ育っても、人々はたくさん相違点を持っている。自分の事を、自分の考え方を他人に理解させるために文学は進歩していき、他人との議論の中で新たなアイデアが生まれ、科学は進歩を遂げている。ただ、他人の違いが理解出来なくて、受け入れられなくて、今も世の中には多くの悲しい事件が起こっている。その時、第三者の視点で両方の考えを理解して、その経緯や意見を両方に伝え、お互いの理解を促す役割を果たす「中間人」がいれば、共生は思ったより難しくないかもしれない。

未来共生での鍛錬を活かして、研究面で、仕事面で、色々な場面で、色々な人々のために「中間人」となるのが私なりの未来共生プログラムへのお返しだと考えている。

プログラム修了後のいま、医学系研究科の研究員として仕事をしているので、まずは研究面での「中間人」としての仕事について説明したい。「中間人」になるためにはまず私がその分野の事をよく理解する必要がある。2018年4月から仕事をして半年間、私が参加している研究のデザイン、研究対象のリクルート、研究項目や研究から得られた結果等、研究全般についてできる限りの情報を集めた。母子保健に関する研究なので、産科婦人科と小児科の疾患についても日々勉強しているし、研究参加者から頂いたデータを使ってより多くの有用な成果を発表できるように、努力している。研究に関わっている研究者、事務員、医療関係者は皆よりいい研究を実施して、よりいい成果を研究参加者へ還元する事を目標に頑張っている。そのために必要不可欠なのは研究参加者とのコミュニケーションである。大規模な研究であるため、参加者一人一人を訪ねる事は出来ないが、ニューズレターの発信、ホームページへの情報掲載等を通じて、これまでの研究で分かって来た事や活動を報告し、参加者の子どもたちの塗り絵作品をホームページに展示する。また、講演会を毎年開いて、参加者や我々の研究に関心を持っている方々に向けてこれまでの研究結果について報告をする。今年の講演会では、私が研究関係者と研究参加者の「中間人」役として抜擢され、報告をする事が出来た。そして、講演会参加者からの声や今後の改善点等もアンケートを通じて聞いた。

研究以外の仕事としては、「キャンパス・アジア」という世界的な健康問題の解決に向けた医学研究グローバルリーダー育成プログラムの一員として働いている。「キャンパス・アジア」は日中韓3ヶ国の6つの大学が参加していて、私は主に大阪大学と韓国の参加大学との連絡を担当している。ここでは先ず通訳者としての「中間人」となる上で、積極的にコミュニケーションの場を設け、違う環境や制度の

ために生じる誤解やプログラム進行の違いを極力小さくして、プログラムの潤滑な稼働を果たし、また、派遣留学生や受入留学生がもっと有意義な経験ができるように支援している。

未来共生の履修を終えて半年が経った。新たな情報や知識が溢れていたこの半年間、目まぐるしい感じを覚えながらも徐々に軌道を見つけ確実に近づいている。これからの時間はより多くの場面で、多くの人々の「中間人」の役割を果たせると期待している。